

国 語 (A1日程)

(解答はすべて解答用紙に記入しなさい)

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(出題の都合上、一部変更した部分があります。)

近年、温暖化が進行しているためか、夏の猛暑がすごいです。最高気温が三五度を超える「猛暑日」や三〇度を超える「真夏日」が増えています。そのため、毎年、炎天下で、強い太陽の光と暑さのために、多くの人が「熱中症」になります。ものすごい猛暑の中で、多くの植物たちも、夏の強い日差しと暑さに悩んでいでしょう。

夏の暑さが来る前の春に花を咲かせ、暑さに耐えられることは少ないはずで、なぜなら、猛暑にほんとうに困るような植物たちは、一方、夏の暑さの中で、タネではなく、緑に輝く姿で繁茂している植物たちは多くいます。これらの植物たちの多くは、暑い地域の出身なのです。

一方、夏の暑さの中で、タネではなく、緑に輝く姿で繁茂している植物たちは多くいます。これらの植物たちの多くは、暑い地域出身なのです。□ B、アサガオの原産地は、熱帯アジアです。オシロイバナは熱帯アメリカ、ニチニチソウは西インドがそれぞれ原産地です。ホウセンカの原産地は、東南アジアです。

花木類では、キョウチクトウの原産地はインドです。サルスベリは中国南部の暑い地方、ハイビスカスは熱帯の暖地がそれぞれ原産地です。野菜では、スイカはアフリカ、キュウリはインド、ニガウリやヘチマは熱帯アジア、オクラはアフリカ、ナスはインドがそれぞれ原産地です。

ですから、夏の暑さの中で、繁茂している植物たちは、本来、夏の暑さに強い植物たちなのです。そのため、熱中症になることを心配するよりは、むしろ、□ 1 を喜んでいるでしょう。

これらの植物たちにとっては、夏は暑いからこそ、価値がある季節なのです。そのため、夏に、果実を実らせるものが多くあります。畑や家庭菜園では、ナス、トマト、キュウリ、ピーマン、カボチャ、スイカなど、多くの野菜が実っています。これらの植物たちにとっては、夏は「実りの季節」なのです。

夏に繁茂している植物たちは暑い地方の出身であるため、夏の暑さに強いことは理解できます。しかし、暑い地方の出身だからといっても、夏に繁茂するためには、暑さに耐えるしくみが必要です。

真夏の炎天下、海岸や砂浜に自動車を数時間止めておくと、車体の表面は、手で触れるとやけどをしそうになるくらい熱くなります。一方、その自動車のそばで、同じように、太陽の光を受けている植物の葉っぱは、手で触れても熱くありません。「なぜ、葉っぱは熱くないのか」との不思議が浮上します。

問六 ―線3「葉っぱは熱くなつてはいけません」とありますが、その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 葉っぱが育たず日かげを作れなくなるから。
 - イ 葉っぱに水分がなくなり枯れてしまうから。
 - ウ 葉っぱの色が変わり虫が集まらなくなるから。
 - エ 果実があたたまっておいしくなくなるから。
 - オ 光合成に必要な酵素がはたらかなくなるから。
- 問七 ―線4「緑のカーテン」の良い点として適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 室内に入る日光を遮る点。
 - イ 景観を良くし気持ち癒やす点。
 - ウ 空気中の二酸化炭素を減らす点。
 - エ 光を吸収して室内を暗くする点。
 - オ 栽培を楽しむことができる点。
- 問八 本文の内容と合致するものとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
- ア 植物が夏の暑さに強いかどうかは原産地と関係している。
 - イ 夏に育つ植物たちは暑さに耐えられるタネをつくっている。
 - ウ ビニール袋を使うことで葉っぱの表面に水滴がつく。
 - エ 緑のカーテンには葉っぱの小さい植物が使われる。
 - オ 夏に強い植物でも猛暑日が続くと耐えられない。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

本心はわからないけれど、優菜さんの失踪^{しっそう}について、野々花はわたしの想像以上にあっけらかんとしていた。わたしからしてみたら、というか、大沢家からしてみたら、まったくもって考えられないことで、いうなれば大事件だ。

お母さんもおばあちゃんも **A** しっぱなしで、警察に連絡^{れんらく}したほうがいいんじゃないかとか、捜索願^{そうさくがん}を出したほうがいいのでは、とあせりまくった。特におばあちゃんは、わたしのせいかもしれない、と涙目^{なみだめ}でみんなに訴えた。

「どうして、おばあちゃんのせいになるの？」
わけがわからず聞いてみる。

「タバコは身体に悪いって、何度も注意したから……」

「そんなこと気にするような子じゃないって！ 優菜は節子さんのこと大好きなんだからさ」
優菜さんへの腹立たしさと、おばあちゃんへのいたわりがごっちゃになって、妙なテンションの朱美さんだ。

「じゃあ、どうして出ていったんだい……？」
「節子さんより、もっと好きな男ができたからだと思います」

野々花が冷静に答えて、おばあちゃんは目を見開いたまま固まったのだった。

野々花の部屋をノックする。今日は日曜日。朱美さんは仕事で、お母さんは美容院、おばあちゃんは鈴子さんの家にダイコンを届けに出かけた。家にいるのは、わたしと野々花だけだ。

「は？」

「わたし。入るよー」

野々花は、ピンセットでイモリにエサをあげていた。二匹^{ひき}のイモリは、顔をあげて水槽^{すいそう}の壁をせり上がるようにして、エサに食らいついている。

「そのエサなに？」

「乾燥イトミミズ」

「必死だね、イモリたち」

「生きていくためにエサを食べる。でもこの子たちの場合、エサを食べるために生きてるって感じ」

「エサのために？」

「単純明快でいい。余計なこと考えないで済む」

それって、余計な感情はいらなくていいことだろうか。

「ねえ、野々花、カラオケでも行かない？ ひなたにも声かけてさ」

なんの予定もない日曜日。明るい調子で誘ってみた。

「いい、行かない」

野々花が首を振る。行かないって言う可能性ももちろん想定していたけれど、その返答に、わたしはちよつとろうたえた。² 一緒

に行きたかったのだ。

「前髪伸びてきたね」

わたしは自分の気持ちをごまかすように言った。

「切ってあげる」

自分の部屋からヘアカット用のハサミを持ってきた。

「椅子に座って、新聞紙広げて持ってて」

野々花はいやがらずに、わたしの指示どおりに動いてくれた。

「野々花って眉毛の形がいいから、けっこう短めが似合うと思うんだよね。眉の上二センチで切っていい？」

野々花がうなずく。わたしは慎重に野々花の前髪を切っていた。

「どう？ めっちゃよくない？」

手鏡を見せると、よい、と返ってきた。

「なんか手伝うことない？」

ハサミと新聞紙と切った髪の毛を片付けたあと、野々花にたずねてみた。

「なんかとは？」

「ええっと、例えばエサやりとか水槽の水替えとか」

「できるの？」

「……やったことはないけどさ」

「魚とかイモリ、触れる？」

「……触れない……か……も」

つかの間の沈黙のあと、わたしはさすがと野々花の部屋をあとにした。ベッドに寝転んで古い天井を見上げて、自分の行動をかえりみる。³

わたしって、野々花のためになにかしたいんだ、とぼんやり思う。でも、それって、余計なことかもしれない。野々花の本当の気持ちなんて、誰にもわからない。

もしかしたら、自分の気持ちが済まないから、わたしがすっきりしたいから、そういう理由で野々花になにかをしてあげたいのだろうか。それって自分のエゴだよねえ……。野々花にとってはいい迷惑だよねえ……。などと、ぐるぐる考える。

(中略)

ドンッ、ドタンッ！

大きな音にびつくりして、思わず起き上がる。野々花の部屋だ。いそいで部屋を出て、野々花の部屋に向かう。

「どうしたの！ 大丈夫!？」

返事待たずに戸を開けると、マンガ本が入っていたカラーボックスが倒れていた。

「先に中身を取り出さないとダメだった。横着した」

そう言つて、ふうっ、と息を吐き出す。

「模様替え？」

「うん」

「手伝うよ」

散らばったマンガ本を集める。野々花がカラーボックスを窓際に移動させたので、そこにに入れていった。

「これも動かす」

と言って、野々花が洋服ダンスの引き出しを引き抜きはじめたので、一緒に手伝う。洋服ダンスも窓際に移動させるようだ。

「水槽をこっちに置くの？」

と、すっきりしたふすまの前を指さすと、野々花は首を振った。

「そこは空けておこうと思って」

「え？」

ふすまの前にものを置かないで、空けておく？ ということは……？

「いやーん、野々花あ」

我ながら気持ち悪い声が出る。

「わたしも模様替えする。野々花、手伝って」

「うん」

野々花をわたしの部屋に案内する。

「はじめただ」

野々花がほそりと言う。そうだ、野々花がわたしの部屋に入るのははじめてのことだ。わたしは何度も野々花の部屋に入ったことがあるけど、野々花は自分からは来ないし、わたしもわざわざ誘うことはなかった。

慌ててベッドの上を整えて、招き入れる。野々花が部屋をぐるりと見回す。なにか言いたそうだけど、なにも言わない。

野々花と二人で、ふすまの前に置いてあったクローゼットとルームチェストとカラーボックスを動かす。かなりの重労働だったけれど、部屋がこれまでとは違って見える。わたしは、ふすまのふちにがっちり貼っていたガムテープをべりべりとはがした。その様子を野々花が横目で眺めていて、

B があつたら入りたかった。

「すっきりした」

これでいつでも、ふすまが開けられるようになった。

「開けてみようか？」

「うん」

「野々花はそっち側を開けてよ。わたしはこっちを開けるから。一緒に開けようよ。いい？ セーの！」

パンツ。

両方のふすまが開いた。

「わあ」

同時に声が出た。野々花の部屋がすぐそこにある。すごく不思議な感じだ。

「なんかおもしろい」

「広く感じるね」

これまでもずっと隣合っていたのに、ふすまを開けようとは思わなかった。というか、思いつかなかった。

「今度から、ここから声をかければいいね。今まで遠回りしてたもんね」

(出典 椰月美智子『みかんファミリー』講談社による)

問一 〰〰〰線「あっけらかんと」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア あわてて取り乱しているさま。

イ 深く考え込んで、真剣なさま。

ウ 何事もなかったようにしているさま。

エ 人目を気にして遠慮しているさま。

オ とても静かで落ち着いたさま。

問二 Aに入る言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア モジモジ イ ビクビク ウ ウロウロ エ オロオロ オ ヘラヘラ

問三 Bにあてはまる漢字一字を答えなさい。

問四 ――線1「野々花の部屋をノックする」とありますが、ここからわかる「わたし」と野々花の関係を説明したものと最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア「わたし」と野々花は気心の知れた親友同士である。

イ「わたし」は野々花との関わりをできるだけ避けようとしている。

ウ「わたし」は野々花と距離を保ちながらも関わりようとしている。

エ「わたし」と野々花は初対面なので互いに相手を知らない。

オ「わたし」と野々花は心の中で互いに嫌い合っている。

問五 ――線2「わたしはちよつととうろたえた」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 強い口調で断られてしまい、誘ったことを後悔したから。

イ 一緒に行きたいと思っていたのに断られ、動揺したから。

ウ 誘いを無視されてしまったことで、怒りがわいてきたから。

エ 断られることを想定していなかったので、とまどったから。

オ カラオケが嫌いと言われて、心を通わせるのをあきらめたから。

問六 ――線3「自分の行動をかえりみる」とありますが、このときの「わたし」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 野々花のためになにかしたいのに魚やイモリに触れないので、他にできることがないかを探し求めている。

イ 野々花とカラオケに行きたい自分の気持ちがおさえられず、どうしたらいいかわからなくなっている。

ウ 野々花のために行動するべきなのか自分のために行動するべきなのかわからず、とまどっている。

エ 野々花が優奈さんに失踪されてしまったてどういう気持ちなのかを、聞いていいのかわるか迷っている。

オ 野々花のために何かしたいと思って行動しているが、それは自己中心的かもしれないと悩んでいる。

問七 ――線4「そこは空けておこうと思って」とありますが、野々花がそう思ったのはなぜですか。「〴〵なるから。」につながるように本文中から十七字でぬき出しなさい。(句読点等記号も一字に数える。以下の問いも同じ。)

問八 ――線5「今まで遠回りしてたもんね」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを四十五字以内で説明しなさい。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① 最悪のジタイをさける。
- ② 一部の例外をノゾク。
- ③ タイレッツを組んで行進する。
- ④ 教会で式をアげる。
- ⑤ 正月にキセイすることにした。

問二 次の——線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 久しぶりに郷里にもどった。
- ② 直ちに安全な場所に移動しなさい。
- ③ 美しい景色をながめる。
- ④ 心身ともに健やかに過ごしたい。
- ⑤ 使いやすくて重宝している。

